

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：34522

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22653039

研究課題名（和文） 歴史図像学的アプローチによる日本近世の紙幣に関する研究

研究課題名（英文） Iconographical study on paper money of early modern Japan

研究代表者

加藤 慶一郎 (KATO KEIICHIRO)

流通科学大学・商学部・教授

研究者番号：60267862

研究成果の概要（和文）：国文学研究資料館などの国内所蔵紙幣などのほか、海外との研究交流の意図も込めて、整理途上にあつた大英博物館所蔵日本古紙幣（225点）のうち、写真が公開されている180点について解説した。紙幣の整理にあたり、従来は発行者・発行年特定の典拠がしめされることはまれであつたが、本研究ではできるだけ明記するよう努めた。また、紙幣に記されている情報は、それが図像であるか、文字であるかに関わらず、最大限利用すべきとかがえた。そこで、これまで学術研究では着目されてこなかった篆書体による種々の文字や印判なども可能な限り解説をこころみた。その結果、これらの情報も研究上、有用であることが判明した。

研究成果の概要（英文）：I researched paper money issued in either Edo period and early Meiji period at some institutions. In addition to domestic institutions such as National Institute of Japanese Literature, I also visited the British Museum for promoting international academic exchange through my research of its collection. Specifying issuer and year of issuance of each bill, I made an effort to cite sources. It is because most of the catalogues had not referred the resources. To make use of wide variety of information each bill has, I tried to decipher sentences either written or stamped in seal script as much as possible. As a result of that, it could be confirmed that the information would be effective for analysis of paper money.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	400,000	0	400,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	300,000	1,700,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：紙幣、図像学、貨幣史、藩札、私札

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本近世の貨幣には、金貨・銀貨・銅

貨（銭貨）のいわゆる「三貨」と、藩札などの紙幣があつた。いずれについても経済学的

な貨幣観（交換・支払・価値尺度・蓄蔵）に基づいた研究が行われてきている。

（2）しかし、経済学は近代以降の資本主義経済を前提に形成されたものであるため、前近代社会の貨幣を捉える上で決して十分とは言えない。こうした経済学的貨幣観を相対化する作業としては、安国良一氏の「近世社会と貨幣に関する断章」などの一連の業績があるが、いずれも高額な金貨・銀貨が中心であり、国家と貨幣の關係にその関心は集中しがちである。

（3）また、日本中世史においては黒田日出男『姿としぐさの中世史』（平凡社、1986年）を始めとして、1980年代以降、歴史図像学の進展が著しい。そこでは絵画史料を単に事実の視覚的証拠として利用するのではなく、その分析・読解を通じて従来の研究が見過ぎてきた、シンボリズム・思想・信仰や身分制・社会關係などの諸側面が明らかにされている。図像イメージに乏しい錢貨中心の中世に比べて、近世貨幣史はその宝庫であると言える。

2. 研究の目的

（1）本研究の主たる目的は、日本近世の紙幣のデザインを通して、この時代特有の貨幣観・貨幣概念を明らかにすることである。

（2）この時代の紙幣には藩が発行した藩札のほか、商人や村落が発行したいわゆる私札があるが、いずれも近代以降の紙幣とはデザインの点で大きな断絶が明らかに存在する。それだけにこれら前近代紙幣は当時の人々の認識を強く反映していると見られる。

（3）より具体的には、日本近世の紙幣に印刷されている詩文と図像のうち、本研究では特に図像分析に注力したい。なぜなら詩文は庶民にとって理解が難しい篆書体による記載が中心であるが、図像はその主題がより理解しやすい、高い情報伝達力をもつ手段であると考えられるからである。方法論としては、歴史学分野で近年進展著しい歴史図像学の成果に学ぶことにしたい。

3. 研究の方法

（1）基本的な史料は古紙幣である。これらについて、できるだけ多数のより鮮明な画像データを収集することが必要である。古紙幣については各地に個人の収集物をベースにしたコレクションが多数存在しており、それらについて丹念に調査を行う。

（2）収集したデータについては、基本情報として詩文を解説する。画像データについてはまずはその構成物と主題を把握する。

（3）最終的には図像の主題を踏まえて、貨幣に込められた観念を読み取る作業がなされることになる。これらの分析に並行して、補助的な情報として、紙幣のデザイン・印刷・流通過程についても調査を行うことにしたい。

4. 研究成果

（1）藩札製造に関わる職人について

まず紙幣発行に必要な版木・印判を制作し、「銀札師」などと称される職人は大坂にあるていど所在していたようである。

「浪華買物独案内」（天保3）『大坂経済史料集成 第11巻』には9名が掲載されている。たとえば、そのうちの一人、明石屋定七良（北久太郎町心斎橋筋）の記載をみると、「銀札・石印御印判、書物版木師」と表記されており、藩札の版木だけでなく、書物の版木なども製作していることがわかる。他の銀札師もおなじように、一般の版木・印判の製造のほか、藩札に用いる版木・印判の製造に携わっていたようである。

弘化3（1846）年刊行の「大阪商工銘家集」（大阪府立中之島図書館所蔵）に掲載されているのは松岡利兵衛のみである。しかし、営業形態は基本的には同様である。同人の場合は「実印師」として分類されているが、その営業種目は、「御銀札米札類」のほか、金銀銅玉石竹印、唐和水牛御手形、黄楊押切判類、書翰袋仕入品々、帳合判、木綿さらし判、青印判白木判仕入卸、狂歌はいかい御摺物御好次第、黄紫朱青墨唐印肉、ときわめて多様である。

慶応3（1867）年の「商人買物独案内」（大阪府立中之島図書館所蔵）には松岡栄作のみが掲載されており、銀札のほか、石印、実印、黄楊印、摺物印肉御好次第、が営業種目とされている。

上記三書の掲載人数はことになっており、「浪華買物独案内」が9名、他の二書がともに1名であった。この点について、銀札師として掲載されている松岡利兵衛自身は前者については発行しているため、同業者の掲載をあえてさけた可能性が考えられる。しかし、「商人買物独案内」については、同じ松岡姓の松岡栄作が発行者として名を連ねているものの、松岡利兵衛との關係は不明であり、今後はそれぞれの機能や編集方針に立ち帰って検討する必要があると考えている。

以上のように、藩札の製造には大坂に所在する職人が関わっていた。そして、かれらは藩札の製造のみに関わっていたわけではなく、多種多様な営業種目をもっていた。藩札の図像や文言を考える場合には、発注者である藩側の事情や意向だけでなく、こうした職人の存在形態も視野に入れる必要があるように思われる。

(2) 紙幣のもつ諸情報について

従来の藩札研究など、紙幣を扱った研究では一見して判読できる、発行者や発行年の情報が重視されてきたと考えられる。

しかし、紙幣には簡単には読めない情報が盛り込まれている場合が多い。それはたとえば図像がその一つであるが、それ以外にも篆書体で印刷された文字がある。この篆書体の情報は文章に使用されている場合のほか、印判において用いられることもある。これらは恐らく研究者自身にとって判読が難しいことと、同時にその使用者にも読めない文字であるかため、当時の使用者にとってもほとんど読めないだろうとして、いわば意味のない「飾り」としてみなされていたと思われる。



写真1

しかし、必ずしも流通していた時期において読めなかったとは限らない。また、発行者がある特定の文字をえらんでそこに印刷・押印している以上、そこに何らかの意図や事実が反映されていると考えるのが自然であろう。

本研究では上記の立場から積極的に篆書で記された諸情報の読み取りに努めた。その

例を以下で紹介したい。

たとえば、写真1は摂津菟原郡で発行された私札で（大英博物館所蔵、史料番号AN1029556001）、従来の読み方では天上寺が発行者で、その引替には「柴屋善三郎」という、商人らしき人物があたっていた、という理解になる。

しかし、表側の中央部に押されている朱印に注目すると、新たな情報が得られる（写真2）。これは「都賀十五村」という篆書体の文字から構成されており、ここから発行に関係していたのは天上寺と柴屋だけでなく、都賀庄という中世からのつながりを想起させるまとまりをもつ、十五の村々もそうであった可能性が示唆されるのである。



写真2

さらにこの「都賀庄」に着目してみると、山城国の嵯峨御所御用所が発行し、井床利平治が引き受け、角屋源蔵が引き替えであった私札（写真3）にも、この「摂州都賀庄組合」とあることから（写真4）、「都賀庄」という村落結合が両者に関与していた事実が浮かび上がってくる（大英博物館所蔵、史料番号AN1032343001）。

上記の私札は、いずれも図像の点では、いずれも定型化され、迫力に欠けるものであるが、文字情報を精査してみると、第三の関係者の存在が明らかになると同時に、これまで無関係と思われていた私札同士の間に関係がみいだされる結果となった。このように史料として紙幣をより有効に利用するためには、図像情報・文字情報を合わせてこれまで以上に活用する必要があるように思われる。



写真3



写真4

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①加藤慶一郎、近世近代移行における播州三木町の通貨構造、流通科学大学論集（流通経営編）、第24巻、第1号、査読無、2012、pp. 168-189

<http://www.umds.ac.jp/kiyou/r/R24-1/167-189.pdf>

②加藤慶一郎、近世後期における通貨—高松藩を中心に—、松山大学論集、第24巻、第4-2号、査読無、2012、pp. 247-268

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 慶一郎 (KATO KEIICHIRO)
流通科学大学・商学部・教授
研究者番号・60267862

(2) 連携研究者

高田 倫子 (TAKATA MICHIKO)
神戸大学大学院・経済学研究科・研究員
研究者番号：60584563